



嵯峨の主人作
姉と弟

特別
文庫14
A164



少年の文学

姉と弟

嵯峨のや主人



一回
 雪野潔が世界中で一番好きな人といふのハ
 でしよ、其次が姉様で、其次が乳母で、其次
 が父様でしよ。母様の雪野夫人といふのハ氣
 立がいっそお優しくて、子供を可愛がり、よ
 く教へ、よくお育てなすりまれの、誰ごと
 て母様を己るく思ふとのハ有ハしません、ま
 だ二十八九の花の盛で、~~●~~有なが、何時もお
 母のさしぐとし、時ハなく、お胸ハ餘程の

一

悲^{かなしみ}を持て居るものと見えて、
 年^{とし}中^{ちゆう}鬱^{ふさ}々^つと物^{もの}思^{おも}
 へしきさうお見えまし。唯^{ただ}姉^{あね}弟^{あに}の子^こ供^{ども}二人^{ふたり}が
 右^{みぎ}左^{ひだり}から取^{とり}ついで、愛^{あい}度^ど氣^けな^ない話^{はなし}とかけと
 り、たこいもな^ない事^{こと}を問^とひかけたり、又^{また}お
 さい遊^{あそ}びに誘^{まね}ひおしりて、時^{とき}のみハ、お
 の思^{おも}を暫^{しば}しお忘れな^なさる^るとの次^{つぎ}、お心^{こころ}か^かと嬉^{うれ}
 しいと見^みえて、お色^{いろ}包^くもきて、さ^さも樂^{たの}し^しさ
 うお莞^{わん}々^つ々^つとお笑^{わら}ひお^おをさる^るのが常^{つね}でし
 る。が子^こ供^{ども}が表^{おもて}へでも遊^{あそ}びに出^いでて仕^し舞^まふと、
 又^{また}一人^{ひとり}室^{むろ}の隅^{ぐも}の方^{かた}お坐^まつて縫^{ぬい}物^{もの}などをしやが

5. ひと何^{なに}事^{こと}を思^{おも}ひ煩^{わづ}ふ様^{よう}お寂^{さび}しきうや
 本^{ほん}息^{いき}とやされて、居^ゐる次^{つぎ}居^ゐるお娘^{むすめ}も分^わりぬ
 お静^{しず}かお居^ゐて、其^{その}でい^いん^ん今^{いま}の若^{わか}
 さ小^こ家^か席^{せき}お向^{むか}つてお念^{ねん}佛^{ぶつ}、珠^{たま}敷^ぎを爪^{つま}繰^くて佛^{ほとけ}を
 お念^{ねん}じな^なさる^るのが常^{つね}でし。彼^あ様^{さま}
 何^{なに}故^{ゆゑ}母^{はは}様^{さま}ハ他^{ほか}の叔^{おじ}母^{はは}様^{さま}の様^{よう}でハなく、
 悲^{かな}しきうやお居^ゐてな^なさる^るのさうや？
 と涙^{なみだ}が柳^{やなぎ}のお梅^{うめ}嬢^{ぢやう}お尋^{たず}ね事^{こと}も縁^{いづ}度^{たび}でし。と
 うり、幼^こ見^み等^らの目^めおハ父^{ちち}様^{さま}が家^{うち}お居^ゐての目^め
 ハ少^{すく}く、何^{なに}故^{ゆゑ}か、別^{わか}れ^れ庄^{ぢやう}おのみお住^す居^ゐて、然^{しか}

も其処そこにお花はなといふ義うつくしい女をんなが居をる事こと、其それが其その原因げんいんであるといハ分わりませんでし。唯ただ何なに
 故せ父ちち様さまハ彼かれ様さまにお家うちにお居ゐるでなく別べつ荘しやうののみ
 お居ゐるでの歎なげ、よし又また家うちにお居ゐるでの時ときでも何なに故せ
 母はは様さまハ彼かれ様さまにおよそ一ひとツ室むろにお居ゐる
 の事ことハ稀めづらなく、偶たま母はは様さまが市いち用ようの事ことを申ま上あげ
 も、其それをよくも聽きかだ邪よこしま見けんふのみ申ま取と扱あつかひな
 さうの歎なげと思おもつて居ゐまし。而しかして母はは様さまがお
 柔なしい氣きからかしも父ちち様さまハ逆さからはだ、唯ただハ
 イハイとお聞きこつて居ゐるが、悲かなしきうな

お鳥とりをよめるのを見みると、涙なみだも悲かなしくなつ
 て来きてとらへまらば、
 何なに卒つと父ちち様さま、母はは様さまを可愛かわいがツてあけて下くださいよ
 と泣なき出でせば、母はは様さまハ涙なみだをかくし切きれず室むろを
 出でてお仕し舞まひなす。父ちち様さまハ涙なみだの頭あたまを撫なで、
 又また父ちち様さまの子こ歎なげ、どちどちううぞ？
 とお問とひなさいまら。母はは様さまの子こぞと言いへば父ちち
 様さまがお怒おこりなすさうし、父ちち様さまの子こぞと言いへば
 母はは様さまがお悲かなしみなすさうし、如何いかししと宣のたまふ

う？どつて潔ハ父様よりハ母様が遙はる好よの
 てれもの、黙だまて答こたへん小居こゝろると父ちちハ無理むりのハ
 問と質ちしれせん、我わが子を打うち棄すてて其その仇あやまち別べつ庄しやうへ往いつて
 お仕舞しまひふりまましし。父ちちが室むろを出でてゆゆや
 否いやや、潔きよハ走かちて母様ははさまのお室むろへ逃にかかと、母様ははさま
 ハ何なにもの限かぎの方かたにお坐まりななつて、尺しやくをお膝ひざ
 の上うへへお突つきおおつて、目めを閉とじて何なにか考かんへてお
 居ゐてななささ、其その日ひハ浪なみが充み溢あふあつて居ゐま
 ん。
 母様ははさま、泣ないてハ厭いやでれよ、母様ははさまがお泣なかかつと

潔きよハ悲かなしくなりままんかから。よう泣ないてハ厭いやでれ
 よ、よう母様ははさま！
 をがり付つて其その袖そでを引ひ張はれば、母様ははさまハいきなり
 潔きよをお膝ひざの上うへへ擦こりこせせて、
 お前まへと母様ははさまの子こ供どもへ、父様ちちさまの子こ供どもへ？
 とお尋たずねてしし。潔きよハままぐぐと胸むねを裏うらかかせて、
 暫しば時しハ母様ははさまのお胸むねへ指さささすすの、字じと書かいて居ゐるが、
 真ま成なりの所ところ父様ちちさまよりハ母様ははさまお好よううのでんかから、
 静しずままええなない様さまや、低ひい声こゑで「母様ははさまの！」と言いつて
 耻はづづかかううふお胸むねへ額ひたいを押おささすす、只ただとかくととく

母様ハさる可愛といふ様おしつかりと潔を
 締めて、自分の頬と綿の様な潔の頬子押当
 て、お抱故潔の北中ハ痛位でしと。お
 様ハ締て居る手をおゆるめおなつて、うるむ
 目元小潔と眺めて、
 あ、お前と母様の子とお言ひどが其ハ已
 るいよ、お前と母様と父様と二人の中お出
 来との故、二人のお子でんお
 刻父様がお尋ねの時人何とお言ひま
 松

張母様の子とのお言ひでしと、
 と心配さうお尋ねれば、潔ハ可愛らしい頭とふ
 って。

其は父様の子とのお言ひでしと、
 其は、何とお言ひでしと、
 共言てもなかつたか、あ、左様、其は、
 何共、何
 左様、お前と父様と母様との子でんか
 左様

言ひ聽せて潔の頭を撫れハ潔ハ静母親の息を
見奉て。

だつて母様ハ私を可愛がって下さるが、父
様と少し可愛がって下さいませんとの、だ

と何れも母様の子どもと思ひまらん已
否、父様だつて可愛がりなさいまらんよ。

お可愛がりなさいが父様の男で、外の用
がまゐるのでお家にお居ての事が少いの、其

故お管ひなさるぬ様お見えの、母様のせで

其れお家にお居て子供の世話をするのがお役、

母様の賢婦でんか、潔お父様を己らく思てせ

るの善いとい辯護しそお諭おなりました。

か無心の子心おハ却て承知が出来ません、何

処み合點のゆかぬ所があるのてん、其故不

だつて父様の用が済んどつてお家へ帰
らに、始終お許お居て、何故な

んでせう？ 矢張別荘小市用があるのてん
か福へ？

あ、お前のだよ、お前がからお帰りなさい
らないのだよ。

何の用でせう福へ、お花さんでも市
用が、お前のでんか福

潔、何でもなく言ッて、お花さん
て、お前が、一寸傍を向て、

斯う被仰ッるお花様のお言葉が潔小ハ酷く悲しく

思えれまし、而して子供心か父様が此様

好母様をお厭ひなさるのふハ、何でもお花が

悪かるとどうも、分りまし、世界中で一番厭ひの

人おなりまし、お花と真成の不可奴でん福、私

福へ母様、お花と真成の不可奴でん福、私
ハ大厭ひ、いつかも乳母と別荘へおきまし
さす福、私お前が抱ッてりなさい
と言ッて、其れか歌と云ッて脱み付て
ツと、真成お彼様憎奴ハ有ハしなさい、今度性

酷月み遇たせてやらぬ。
 幼心の悪しい母様の方を持てお花を包るく
 言へば、母探ハ歎息をなまきりて、
 あ、お花を包るくお言ひごと、お前が
 花を悪くお言ひごと、此母探が迷感しまん
 よ、よ、母様を大事と思つておくれなす決
 して悪く言ておくれでなはいよ、若其が父様
 のお取へで力這入て而既見、此母探が如何
 様お父様か憎まれるか知れないよ。
 言ッて悲しさうなお魚をなさいまーと、心の

宜からぬ妻のお蔭で業寺の妻にお母りの悲、
 其情ハ潔みハ分るなかつたが、然しやさしい
 お魚の母様が優しいお言葉附て静小お諭おな
 るのでんもの、幼心の母様が可哀さうてな
 まらば、何故此様やさしい母様を父様ハお厭
 ひなさるの歎と思ふと、寧父様が恨めしく、
 だのぞ私ハ父様ハ厭ひなもの、母様を此様小
 意地目て置て家ハお帰りなさらないので
 んもの。
 さも憎ししさう小言ハ母ハ潔を信度暇みて

うと、可愛らし、胸の母を思ッて、急で家へ
 て、たまに、何故か、母様の事が気になッ
 白が月お見え、何故か、母様の事が気になッ
 ら、母様の事を思ひ出さ、然し、其れ、小見の事、故
 主で、家お、唯、漸、の、居、計、其れ、小見の事、故
 表へ、遊、び、お、勝、で、あ、か、然し、其れ、小見の事、故
 も、ふ、と、母、様、の、事、を、思、ひ、出、さ、と、然し、其れ、小見の事、故
 母が、月、お、見、え、る、の、で、母、様、の、事、が、気、に、な、ッ
 うと、可愛らし、胸の母を思ッて、急で家へ

何の事でも、父様を憎ら、父様の家へお帰り
 い、四討が当りまらんよ。父様が、お家へお帰り
 や、さ、さ、さ、い、の、も、一、つ、ハ、お、前、達、が、わ、ん、ち、や、ど
 か、か、若、お、と、や、し、く、何、て、父、様、々、々、と、暮、ら、て、ジ
 ら、ん、父、様、と、つ、て、お、前、達、を、可、愛、く、思、ッ、て、
 三日、お、一、度、位、と、お、家、へ、お、帰、り、ま、さ、し、様、お
 たり、ま、し、ま、だ、の、は、是、か、ハ、父、様、が、お、帰、り、ま、さ、し、
 下、つ、時、ハ、始、終、お、傍、へ、往、つ、て、父、様、父、様、と、お、暮、ら、
 ひ、申、ま、さ、し、ま、さ、し、ま、さ、し、ま、さ、し、ま、さ、し、ま、さ、し、
 とお諭せし。然し事情が潔の家にお有

4

帰ッて東て椽側をさく、
 りと元けて飛び込ひが、
 目縁小涙の痕で見やると、
 て身をおいて心配さうみお
 して母様がお冥を奉て其本
 寂しさう小莞尔お笑ひなさ
 まらばお傍へ寄ッて、
 母様如何歎なモッとの、
 お腹でも痛いので
 心配さう小問ひまらんか是
 が如見おハ精一杯で

思ハバ嬉しく、
 あ、母様へお腹の痛のよよ。
 さう、不可解、私が叩てあげませう。
 直背一廻して紅葉の様な小
 母の背と叩かうとしまん、
 小誰か此様な可愛い事を教
 へようさうなれらるりと後
 へましとさう、母
 あ、さう直りまし、さう直
 直か、何歎お話をし、さ
 何歎お話をし、さ

十七

時ハ先の終ニ回であり
 をたまし後此方の可愛かあの如何どし
 と除そけ寝室ねむむ一這は入いて末すて屏風びやうぶをかきめけ、
 枕まくら上うへへ身みを曲まりて深窓ふかまどを見みれば、執とと見みえて
 夜具よぐから少しせうし乗出のりだし、可愛かあらしい暮向くれむか亮りやう入いり
 天あま我鳥わがとり紙し枕まくらを外はして、御おん向むかひなつて眠ねて居ゐる
 観かんて居ゐるならば、寝衣ねぎの袖そでがまくれて其下そのしたから差さし
 さき午ひるの可愛かあさしさといつて、ひつくりといく
 神様かみさまの様なやうな無な

是で面おもてが終はりてん、悦よろこぶたしな枚まい、
 ニ回にハいハい

十八

今も露が垂れて落ちる夜の様で
 我命半ひしり取り上る思ひでん。
 と静夜具を引上げて、暫時ハ我子の
 眼見お見と居ま。此処へ九歳ハ
 姉の梅子嬢がわと〜と駆り来て取
 母の調子で、おして愛度氣なくふり
 母の此処に抱く。上様と用もな
 いを母の膝が如何様お喜びしい
 と見えて、

心の息を〜と眠て居る後の愛度氣な
 色小色づいと義しさと云てハ、
 として居て中も〜と云てハ、
 母ハ覚えに切其頬に接吻
 見ハ夢の中ながら可愛慕人の柔か
 自ら抱いて、而して温かき恩愛の唇
 風の東て頬を撫る様ふ、吸ひ〜と
 とでせう！ 莞尔と嬉し〜と微笑
 とが、其時の頬の笑の愛し〜と

寝を蹴出しなが目とほれば
 そろく乳母と慕えしきさる小
 声で乳母と慕えしきさる小
 の耳へハ如何様遠く小居ても
 声はよく聞えるのでん。乳母
 大道何れの秋のといふ大きな
 と走て来まよ、而して小島様
 ツと色の白いやさしい鳥小
 といながら莞尔と笑つて、
 おやお目が覚まよと秋の、ど
 其でハお召

倒れかゝる様小身を寄せかけ、
 見奉て、黒日勝の愛しい目を
 よく眠て居まよこと祈、
 あ、よく眠て居まよ、
 二人行は出ておさまよ。
 目と覚して起上りまよ、
 の紐のしやう解かりて前
 足、じとさうな風を、歩く度
 小衣服の下か
 二人の歩合の癖とて寝衣
 目と覚して起上りまよ、
 足、じとさうな風を、歩く度
 小衣服の下か
 二人の歩合の癖とて寝衣

木

を着改ませ了。袖、さあ御方の室へ往て。
 角ひ元の室へ連戻り、潔がかけ居て、夜具をは
 ぬ上て、潔の書着物を取出し、さあ着改ませ
 う。袖と引寄せれば、潔の乳母の胸へ倒しかけて、
 の膝を折りて、体を乳母の胸へ倒しかけて、
 何が面白いか、静として居る。乳母の微笑さか
 右小あつてふざけかけまらん。乳母の微笑さか
 あ、左様あげれてハ不可ませんよ、静とし
 て居る。紐が解ハしませんや。

言ひしが、臆で潔の頭を押して、後へ手を廻
 かし、附紐を解き、やつと着物を着改させれ
 ば、潔はさう室を飛出さうとしまらん。乳母ハ
 微笑さか、
 奥成小まめツとむこと！ まごでんよ、足袋
 を穿さくしてハ、足袋を。
 言はれて、賢い仕方をさうふ、其処へ尻餅を
 敷て足を揃え、乳母ハ其足を膝の上
 へ乗せて穿せ、わうと尻餅を、コハせハ自分
 懸るのどか、宜とじふりて、乳母ハかけさ

十一

とむりひさとつ
 さあ直ニさんん
 へ往てお早うを
 言つて乳母の夜
 母探の今朝ハ如
 室一飛込めバ、
 お目覚と名付
 係で喫ちが
 潔ハセハ
 姉探母探ハ何
 何処へいッしッて
 潔ハ
 言つて乳母の夜
 母探の今朝ハ如
 室一飛込めバ、
 お目覚と名付
 係で喫ちが
 潔ハセハ
 姉探母探ハ何
 何処へいッしッて
 潔ハ
 言つて乳母の夜
 母探の今朝ハ如
 室一飛込めバ、
 お目覚と名付
 係で喫ちが
 潔ハセハ
 姉探母探ハ何
 何処へいッしッて
 潔ハ

せに類り子懸
 足袋が新しい故
 きやがら
 しと居る其凡の
 を休めて笑を念
 から、一真成小
 言ひさうな白
 其手腹ふつゆ
 うと言ふので
 せに類り子懸
 足袋が新しい故
 きやがら
 しと居る其凡の
 を休めて笑を念
 から、一真成小
 言ひさうな白
 其手腹ふつゆ
 うと言ふので
 せに類り子懸
 足袋が新しい故
 きやがら
 しと居る其凡の
 を休めて笑を念
 から、一真成小
 言ひさうな白
 其手腹ふつゆ
 うと言ふので

かた

翻ひるがへしとおねんじよさあま！ とニツシツ四ツ
 突つぎ始はじめくが忽たちち消きえて仕舞しまひまし。 潔きよハ之
 を見みて、 己おのあハ海うみつと！ と言いひたかす 訣くわめ
 なく 駈かけ出であしして往いつとが、 何なんと思おもつと、 其そのの 訣くわ干かん
 して有あつと、 傘かさを一つ 採とると、 其そのを 車くるまの 様ようの 小こころ
 ころ 轉ころがしやが、 庭にわを 被おつと、 其そのの 隅すみから 比ひ方かたの 隅すみ
 へと 走はしり 始はじましと、 而しかも 其そのの 隅すみの 白しろさと言いつ
 て、 何なんでも 用もちひ 此この者ものと 雷かみなり鳴なりと 同おなじ 音ねの 小こも
 知しれぬと、 何なんでも 用もちひ 此この者ものと 雷かみなり鳴なりと 同おなじ 音ねの 小こも
 て 暫しばく 走はしり 迎むかへて、 居ゐるが、 ふと 傘かさの 廻まる 度ほどふ

風かぜの 音ねと、 驚おどろしが、 長なが閑かんまささん 朝あ日ひの 光ひかりの 小こも
 芽めも 惠めぐんで 何なん処ところと、 若わかく 春はるの 近ちかづい、 小この 笑わらひ
 かけて 居ゐる、 而しかも 細ほろろと、 脆もろさうな 枯かれ
 枝えだの 間まを 雀すずめが 千ち代しろ々々と 轉ころがり、 脆もろさうな 枯かれ
 を 祝いわひ 歌うたつて 居ゐり、 潔きよハ 産うまへ、 始はじめて 外そとへも
 も 出でと、 柳やなぎの 大おほ層そう喜よろこんで 活くわ潑ぱつふ 飛とび、 始はじめて 外そとへも
 ん。 「さあ、 姉あねさん、 鞠まり投なげを やらう」と 上うへ 投なげ、 外そとへも
 ば、 梅うめ子こハ 鳥とりを 智ちめて、 「厭いとさよ、 投なげ、 外そとへも
 紅こう梅ばいの 折せ枝えだを 染ぞみ、 出いし、 夕ゆふ禪ぜんの 振ふ袖そでを ひきりと

あいよ、今出しとあげまらんよ。
 母が靴足袋を出しとあげまらんよ。
 直してやれば、潔く糸糸総附の帽子と
 て往て参りまんと門口へかゝりまらん。
 の梅子嬢と乳母子着物着改させて貰ひ、
 黒塗の駒下駄を穿て、繋さんおしお街
 ぞ、言ッて、お平玉弄ひながら出て来るので
 せう？、又門を出ると彼等途申種々の珍
 いものお出で、おふりせう、而して糺の質
 で在るかお乳母を困らさるでせう？、而して

其影が延び縮んだりするのを見て、俄子足を
 止めて、何故此影の形と不変をその世に
 と除々と廻りて見て居るかと其原因が分
 ツとこの次、又ごろりと廻りて居まし
 此処へ乳母の磯が来た、
 さあ、赤城の紅葉山を往て見
 講さんて二人の大喜びで、潔く上へ走上
 て、
 母探紅葉山へ往まらんよ、
 靴足袋、靴足袋出
 して下さいな。

変

驚きましよ、母様如何ぞをいつて、
 右の午で額を押へて突伏てお居て、
 母様如何ぞをいつて、お頭痛が来るの？
 母様如何ぞをいつて、此方を右向で
 大層早くお帰りであつて
 困りまされよ。
 如何しよと云てせらる？
 如何しよと云てせらる？

人形の様な言をれよの、大層乳母
 嬉しのでしよから、其れが苦い
 五つの坂を一ツ越して、何の望も
 体消えぬ心の喜び愛樂ハ唯此二人の子
 がれて瞬て居るので、二人を命とか
 しづいて其成人を樂んで居るので、
 子供等二人ハ紅葉山の遊び面白くないので、
 乳母と急がせて帰て来ましよ、
 如何可いさうと潔い奥先小奥へ往て見
 如何可いさうと潔い奥先小奥へ往て見

十八

潔ハ稚心も母恩の癖とて心配さうも傍へ寄り
てお宮をさしのおさまし。此処へ氣母と柳

母様ハお頭痛がなつて、
お母様ハ如何なさいませぬの。早く如何

お頭痛が、其ハ不可ません、
程々の事をお考へて、お胸をお痛がからで
んよ、少しお横おなつてお休みなす方か
宜ございまいよ、其ハお医者に見てお貰ひ

遊でせ、
宮地さんをお呼びませうか？
其処へ床

母様ハ、
お頭痛がなつて、
お宮をさしのおさまし。

三回

母様が脚病氣あしづまになつてからの潔きんじやくの驚おどろき如何どう
 様でしつとらう？ 何時いつも蒼白まろのお只ただの母様あはまが
 今日けふハ夏なつ未みのお只ただと居ゐるので見みるとの稚おとこ
 心こころより何なにでも大おほ変へんにお己おのれの波なみを思おもはれ
 のでしつとらう？ 小こさな胸むねみ小こさな波なみを立たて心こころ配ばい
 するもので見みるとの親おやの身みおなつと如何どう様さまふ
 可愛かわいでせう？ お医者いしや者が事こととすくと潔きんじやくハ玄げん
 関せきへ出て往いつて、
 宮地みやぢさん、大おほ変へんなの、母様あはまがお悪わるい、何どう卒そつ

直して下さいよ、母様がお悪と私の
真面目辱つて言ハ、医者ハ大事ナ病家の未来
の主人故小見でハ、あうが悔ハせじ、
言ッて奥へ通り診察一段何ハの薬とあげま
か、其と斯々小服用して、
と、の、懐んで足の方を温め、
母様のお傍へ寝ると言ハ、
其夜ハ、乳母ハ看病の爲め
潔ハ私ハお傍へ

痛々看病と云ふものごと、
其処へ、
遠入るや否や直眠りこけて仕舞ひました。
日潔が目が覚め、
で、
。、
ま、子供達ハ、
母様ハ、
母様ハ、
父様ハ、
父様ハ、

お慕ひ申せと、此中言えれと事があつたので、
母様のお言付は、此処ぞと思ひ、
お室へ静入りて、
父様此様好殿、一寸御覧なさい、母様小買

て戴いとの、一寸御覧なさい、母様小買

言へば父ハ、九月と、いふ様なお言付をなされ
て、一寸後をふり向かい

うむ、好のぞな。と、言ッ、切り又前を向てお仕舞で、
がし、あよげ返ッ、が、でも、面氣を取返して、

昨日と、母様が所病氣ななり、この、
きよ〜いよ。

前を向くま、いふ。潔ハ父の冷淡ハ二の句も
出でん、情なき、うよ、其後姿を見詰て居るが、

やがて器械のみ、父様何ぞお居てなさいの。

此時父ハ、潔と、眺みて、
唯一言、あ、九月、人の用を、居る、馬席奴が。
唯、一、言、あ、九月、人の用を、居る、馬席奴が。
唯、一、言、あ、九月、人の用を、居る、馬席奴が。

さんね是ハ中々私の午ふハカぬ、別子名匠
を頼んで来るかと自ラ申斗籠れ、田舎の
都へ出張して、東國平を招待して来ませぬ。
國平ハ野郎夫人と診察して、是ハ一時の病
氣で、さして心配する事ハ有りませぬ、
全快おありでんとお言ひせし。又夫人の右
安々して看護の午を盡しまし。又夫人の右
か、ハ祖母様と、其ままお片附なすかぬ
夫人の妹、二人の爲めハ叔母様の糸子と
つふめが、代り、又看護のおおでしと、殊

お一ノ看護人ハ二人の姉弟でありませし、
彼等ハまご幼稚故母を慰める氣で慰め、事ハ
少かつとので、然し其無心と、其愛度氣な
さと、其愛さしさとハ充分母を慰め得まし
、彼等自身で思ふよりハ十倍も百倍も多く
慰め得まし、實ハ夫人ハ医者と看護とニツ
ながり宜しきを得たので、二月の末から三月
を全一月過て四月の半、櫻の花の咲く頃ハ
全く全快とありませし。
ある日の事と、お医者宮地さんハ例ハ

て居ましと、^か其その小こさいか、傍そばをはと
事ことなく、お軍ぐんの祖母おばあの元もとへ泊とどりかき、
夫人ふじんと一所いしょでなれば泊とどりかき、位ゐでまじ
の、今いま之これを午ひる離はなして置おいてゆくのは、夫人おん如何どう
様よう不ふ潔けつし、か、つ、の、で、は、其その故ゆゑ火ひ燈あかりおなつて
か、潔けつをは元もとへ置おいて、少せうし涙なみだみ、
潔けつやお前まへ母はは様さまが湯ゆ治ぢへ往ゆて暫しばらく留とどりまはる
と、おとなしくお留とどり居ゐるが、出で来きまはるか、
と問とひま、さ。さると、潔けつハ、最もとも落おち着ちて平へい氣きの
調てう子しで

厭いや母はは様さまが湯ゆ治ぢへ、お出でな、
よ、お家うちの、残のこつて、るのハ、厭いや、
と、鼻はなを鳴なしました。

おや、其その様よう分わりな、い事ことを、い、
せんよ、母はは様さまハ、市いち病びやう氣きど、か、其そので、ゆ、
お前まへハ、丈だけ夫ぶが、か、お家うちの、居ゐるの、
ど、つて、お前まへと、置おいて、行いく、ので、は、
長ながく、往ゆて、居ゐる、と、い、
れ、おせ、さ、さ、さ、さ、と、お留とどり、
直ちか帰かへて、来きまは、よ、
其その様よう、
お前まへハ、丈だけ夫ぶが、か、お家うちの、居ゐるの、
ど、つて、お前まへと、置おいて、行いく、ので、は、
長ながく、往ゆて、居ゐる、と、い、
れ、おせ、さ、さ、さ、さ、と、お留とどり、
直ちか帰かへて、来きまは、よ、
其その様よう、

と言ひまゝに、が潔ハ中々おすまじ人、
 厭家小居るのハ厭、私ハ母様の行く所
 へ何処へでも行くの、若置てもくのな
 往ちや不可、私ハ母様が居ないと寂しいと
 の、泣きとくなつてらふあ。
 と言ひまゝに。幾つおとやしい賢い子でも年
 がまぶ年でん、一ツじくおるとおやうと
 て中々人のいふ事ハすません。母ハ尚も言葉
 やさしく。
 困りまじ福ハ、其様分らない事を言つて、

お前とう幾つあおたりど、六つていさい
 其どのお寂しいやど、意氣地のやい、母様
 が居ないと、お寂しいと、お寂しいと、
 外大勢居ると、お寂しいと、お寂しいと、
 男の癖は、お寂しいと、お寂しいと、
 とお論じど、お寂しいと、お寂しいと、
 だつて私ハ母様のお係り居ると、いのでん
 の、他の者やんごあ居ると、お寂しいと、
 いが、母様が居ないと、お寂しいと、
 るのでんとの、だから母様が居ないと、

かゝる同伴で行つて下さいよ、よう母様、
生一生の御願ひから、よう母様、
ようてバ

袖を取てふり廻してしまし、
今直あせり行かぬかと思お標よ、
同伴てハ行ませんよ、

何故？ 心配させられハ宜ぢやありませ
ん歎、和木話、
母様、同伴て行つて下さいよ、
私母様と
同伴て行つて

遊びまれば、お話しり何故しそ、
何故？ 心配させられハ宜ぢやありませ
ん歎、和木話、
母様、同伴て行つて下さいよ、
私母様と
同伴て行つて

下さいな、厭？ 何故？
てくれなくツちや、よう母様、
母様、母様てバよ

う、同伴て行つて下さいな、
と云ひつゝ母の膝の上、
二実、居まらん。母も終つ我を折りて其

を氣取か、
左の同伴て行つてあげやうと、
合點居を合點させまし

明、
左の同伴て行つてあげやうと、
合點居を合點させまし
左の同伴て行つてあげやうと、
合點居を合點させまし

充益、
何共言
何共言

一同を頼みて、~~ズリ頼ま~~頼まんと書て
留主の所へ。

又同伴の人を伺て、

さあ其でハ。

言つて車へお乗せし。

姉の梅子嬢と停車場

まで送るのぶといふの
車夫が根棒を舂ると
同小目礼儀

し、~~而して~~而して車が門母を
ハ幾度後をおふり返
其後影を見送て居る

関の敷臺お並て惜然と
其後影を見送て居る

車が門母と出さるや不
直に自分の室へかけ
戻りま。

表七所り

夢でハヤい奴走出〜〜が、
中ちゆうの間まで鳥とりを見み合あは
す。母はは探たづね！
一ひと声こゑ嬉うれし〜
是こゝ程ほど嬉うれし〜
二人ふたり共とも物ものも言いは
ない。唯ただ嬉うれし
なまゝ泣なて居ゐ
る。潔きよハ
母はは子この室むろを遠とほく入いりま
す。潔きよハ

夢ゆめでハヤい奴やつ走出い〜〜が、
中ちゆうの間まで鳥とりを見み合あは
す。母はは探たづね！
一ひと声こゑ嬉うれし〜
是こゝ程ほど嬉うれし〜
二人ふたり共とも物ものも言いは
ない。唯ただ嬉うれし
なまゝ泣なて居ゐ
る。潔きよハ
母はは子この室むろを遠とほく入いりま
す。潔きよハ

とお作とが迎ふ出ましと。わと漣を子笑を
會んで。

大層お早うございませう。彼様、御直に
お引返さされまい。此方の氣車もせま
うと申し居りませう。よくお早く。潔

様お嬉しうござんせう！
と世辞一通をいひまはれ。

夫人の潔お上野を見せといかた、
荷物を持つて先お宿屋へ歸てくれと之を席し、
お作と共お三人上野の山へ登りませう。山

王臺お登つてハ東京の人家のまき子おどろ
章義隊の墓お對してハ當日の榎木の概畧を説
り、清水の御堂お登つてハ大悲の利益を心
念じ、彼から大佛を一覽し里門を見て、而し
て自動鉄道の前へ出ませう。波舟の長橋、其
上を廿六人の人を載せて走る一輛の車、何人
お牽かす、のでもなく、唯吾と自らせく不
思議と一同
るのでもなく、唯吾と自らせく不
思議と一同
感服しませう。潔お人の乗るお
り、乗て見て大層喜んで居ませう。

母標 大變は早いよ、あれでかけのハ、
昇る時、ハさうでも早いけれど、
一でも落ち様でなよ、あ、何んか怖い標で
はがれ、だけど大變小面白いでなよ。
是から五重の塔を見、東照宮の社を眺めて
して、御物園へ入りまして、何時も母より先へ往り
あがって喜びました。何時も母より先へ往り
ハ又後戻りして、何して目を丸くして、
母標早さ、早くさ、如何も大きき象、大
變は大きき象が居るんでなから

と案内員で、是ハ自分も珍しくて面白
いから、母も定めてさうであらう、早く見
せて喜ぶせやうと、いふ心で見えまは。而し
て母ハまご立って象を見て居る中、自分ハ早
くも御方を見ると、大勢人が立って駈で居る故、
忽ち其処へ往って見ると、走り往って見て走り
戻て来て、
母標 彼方ハ虎、如何も大變、
さう、如何も、如何も、
あ、母様立て、あ、吠えて、
彼人が石を打ち付

言ッて又彼方をふり伺さまん、而して又其処
一かけてゆきまらん、而して又大ききき声で呼ひ

立まらん、
母様！
母様！
早く来て御覧なさいよ、猿

が彼様事をし、早く面白いかうさ、
其ハ諸

斯呼び立ててハ母も其の迷惑でん、
其ハ諸

全体子又對してハ大度量のこのでん、
其ハ諸

君も覚えがかりませう、
諸君が少しも白くを

言ッても母ハ大概其思へ、
諸君の腕白くを

いふとのハ

てくれませう。潔の母も恰度其でし、
我子

の呼び立てるハ何時も何の不平もやく心廣く

も現たれて来まし、
潔ハ又草深い田舎小育

て、始めて東京へ来て始めて此探りの見え

ので、始めの、目よ入るとの皆珍しく面白さ

の餘り喜びと驚きの声を呼んで居まし、
其

不忍の辨天へ請りて、
三橋から新橋の旅

市夕暮が、
三橋から車へ乗りて新橋の宿

つと向ひま、
途沖も潔ハ、
何の程も

其の人のほろあ、
南北も潔せ、
前より後

お
雅子 母親のぬえのハ 雅児を頼りて来るの幸
でしと、 若しさうでなかつたやうに、 彼女の長居
しとてありましとさうの、 然し彼女の全盛
で、 ありましとさうの、 彼女の故郷の
お 本居へ来て居るとすて、 唯此の地の
心と傷める程とありましと。 然し其の
向ひてハ 其の心癒へ、 其の
やう 雅児のたごいさの事を聞てハ其沈

樹ぼれと心も花けて、 彼女の全く壯健の人と
ありましと。 曾て蒼白であつた其の色も
色と帯びる程となつて来ましと。 又此の
は、 子お紹介せよとて、 彼女の知人を此の湯治
場にお得ましと。 而して又彼母子の昔ハ
任んぬの種となりましと。 一七八九の最
容我秀麗の婦人が、 深白な装束を、 白波の打寄せ
しと愛しいお見の午を幸て、 白波の打寄せ
る海岸を道通して居る彼女の注目を
惹きましと。 氣の早い婦人の、 彼女の子が

を意地目さう様、其とも彼らふ人さか
可愛がりのか？

ハイ意地目さいの、可愛がってくれま
よ、少し考へて居るが、お母様、私ハお

花さんハ好人だと思ひまされ。然し伶俐

おさな子ハ無心故さう言ひまされ。顔をあけて

の母親と唯さうと言つたのみ、磯が出て来て

考へ居まされ。此処ハ乳母の女中や男中も出て来

先づ奥つといふ中、他の女中や男中も出て来

奥様のお帰りとさうめまされ。潔ハ梅子と

其室の由き

手をひき合せて別れて以来の事を語るでせう？
乳母ハ又夫人お伺つて留守中の事を語るでせ
う？
余り皆が悪く言ひまされが、お花さんハ存
外好人でござんはよ、お嬢様やぞ可愛が

りまされし様、私共をいさはりまされ。
結構人と呼ぶれど、氣母ハ斯言ひまされ、然し

夫人ハ氣味悪く思ひまされ、お花の奸悪を充
分着破して居る夫人ハ其処ハ通

と恐れまされ。夫人の恐れハ通り場宅後一週間

お経ぬ中、僅の事を言ひが、いりまし、家風
お遇ておぬを言ひ前かし、夫人ハ三行半を受
取て離縁されり事となりまし、十年一日の
如くよく家を守りよく子を教育して何の過誤
もなき夫人ハよからぬ妻の毒告ふおツて、
空しくお里へ帰る事おやりまし、
母様ハ、今度追出されてお里の祖母様の
所へ帰りますんから、お前達ハおとすし
て泣きながらおたりなさい。今はお礼さん

か来てお前達の母様をさうが、昔は母
上様と名の付人みハおとなしく、孝行を
をよのでんよ
と言ひまし、
人ハ物も言をん、唯しく、と泣て居まん。あ
、今まで恩愛の懐き音ておん、因みも当なかつ
、子等二人、鬼とも、地とも、壁へ押のまいお花
、おけりて帰るのかと思つてハ、一お家を出て
、お娘ハ、おの家の敷居を踏ぬと思つて
、お娘ハ、おの家の敷居を踏ぬと思つてハ、
、お娘ハ、おの家の敷居を踏ぬと思つてハ、

此一事でも新奥様の専横の程ハ命りまれ。然
 と乳母のね礮と其の飼猫の駒とのみで、先づ
 家小古くかゝ居る者と云つて、主人と子供
 新小氣入ッとのを偏入れま〜。其故雪野
 して是まで居る男女の召使ハ皆暇をやりて、
 諸君御承知でせう。お花と家政の改革を名と
 小なりまし〜。其才ニの母親の名と言ふと
 とう一人の美しい女が才ニの母親と〜輿入
 母様が家をお出小なツてか〜三日も経ぬ中、
 五回

しま〜。か何〜
 舞ひま〜。而して唯身をま〜
 を伺つて居ま〜。此の向母探ハ往て任舞ハ
 難う明〜。と一母探ハ還ひ〜。あ
 と叩りて見〜。引撥て見〜。権〜
 見〜。二三時〜。後〜
 を好〜。見〜。其時〜
 暮〜。母探ハ形〜。見〜。ま〜。

し彼も中々さる者で、始の中ハ爪を隠して
 子供等も柔くして居ます、然し長くハ
 續きません、まど一月も経ぬ中その化の皮
 を現して来まして、ある日の事でした、梅
 子が学校から帰って来ると、お花と一寸お出
 さいと膝元へ坐せせて、
 梅子さん、お前さんハ今日先の母様にお出
 でしとさう？ 否、迂詐を仰いまして、
 慥にお遇ひでして、貴様にお遇ひな事
 ハ先づ人が梅を知て居まらんよ。

ナッて運もないの、から仕方がないでハ梅
 ません歎、
 血ごころ、左様ぬけ、と迂詐を被仰い、
 子供の癖よ、何も遇ひなを、つとて小言を
 いふのでハなし、陰ハ、あ、女事、
 其を私又陰を梅でハ、未か案じられ、
 言ひまは、歎、言ひません歎？
 と血相を變へて長羅尾の煙管を取ま、
 子ハ驚て胸を裏かせ、
 否而陰し申を、款せハありませんよ、
 梅

ないめでにかた 仕方ありません。否、其
成でんよ、迂詐をい 悔りませんよ。

思言をないね、言をせられん言をせり柳子
しと言をせらぬ。

と言つていきなり其手をつめて、
さあ是でも言ひません歎、さあ、是でも歎

是でも歎？
あ、痛い 勘忍して下さいよ、
いのでんか、よう！ 何年 勘忍して下さ

いよ、あ、痛い。
いよ、あ、痛い。

と注出しまし、潔い 喫驚して、お花又取をが
り、恨む柳な 謹る柳な 柳む柳な 調子で、

あ、勘忍して下さいよ、
私をつめて下さいよ、
のを過さつて、無理ご。

おや、何が無理で、生意氣な。お前の知

事てハないか、引込んでお居て下さい。

だつて姉さんと過を言いとめを過たつて、
世理でんよ。
おや 黙らなれ 黙、でお前さんをつめつ

てあげませう、つめつて上るから手をお出
しなさい、さあ、さあお出しなさい

言つて密鏡をくつめりあげませう。

是を意地の目の手始として、一寸梅子さん、貴

嬢と女の事、他へお嫁に行く体、申々繁を

て居ると不可ませんよ、如何様運でりませう

如何様おもしろく知りませんか、今から女

の業を見習つてお置きなさい、さあ皆と一所子

拭掃除をおしなさい、と自分で附て居る拭掃

除をさせません。否、不可ません、其様紋り方

で、とツとぎつと木紋りなさい、その脚

堅なさい、貴嬢の拭と所、鯨の柄どから、貴嬢

の拭ので、なさいなませぬ、拭といふの、

好きもの、一寸お出しなさい、下り宜ござん

候、堅く絞つて乾拭の、その脚堅なさい、奇麗

おやりませう、何れも堅く絞つて拭さん

それバ、椽側と鏡の柄子、光て来ません、さあ、お

つてござんなさい、え、不可ません、其様事

は、その下が無き、意気地のない、ちやッ

何といふ不器用の子なう、人のいふ事を言

の天で聴てるからでんよ。少し性根をお附な
さい。といつて二の腕をいれといふ程のぬりま
ん。又學校から帰つて来て遊んでお出で
とさうと、左様遊んでハ、任方がぬりません
所本をおさすひなさい。其か、本を復讀して仕
舞ふと、今年八月に舞を指し来ると言ひました。お
花と身も覚え、何もないが、唯月琴計の得
意のでん、其で月琴を梅子子教して不器用と
言つてハ、つねりまん。又時よとと肩癖を打
せえハ、其癖のう〜と事むり、
利達きません、

肩を搦とハ、梅子子させるよハ及ぶぬのでん、
れで骨の癖とハ、梅子の癖とハ、
梅子子させるよハ及ぶぬのでん、
他の者よハさせないで、お家もぬく子の
ぬすしハ、覚えと置めぬとお姑の機嫌を取れま
せぬかどと、上部ハ大層立派でん。是等ハま
ごまご意地固のいろは、
なつて来と、無理難題の改訂計、
の雨と日毎の標、
んでしと。姉弟三人の体よハ

女主人が此体故世中一同も二人を侮って主人
を主人とも思ひませんでし。唯一人乳母の
お磯のみハ此体を見ても口惜しさも堪へん。あ
、奥探のお居の時ハお二人共愛もつらい
も知るか、お取が、今ハ彼探は小さくや
て彼お花面は苦しめられるとハ、何ともお可
愛さうな事なのさう？ 私も奥探のお居で
の時おハ乳母さんと言えれと身が、今ハ指
の無親おせばめられて、寧ろ暇を取つてと
思つてお見るが、さうしよと利を杖と甘さ

る二人のお子がお歎きさうさう、此上何保
つといぬをなさう？ と其はツかりが心配
で今日までハ斯して居るもの、嗚呼恨めし
い浮世おなあ！ と一人心を痛めて居ましと。
然るに此一人の保護者の乳母さへ少しお花の
意は逆さう、其ハ一事で、お磯を放逐さる事
りまし。其ハお磯を放逐さる事と
るの、乳母さん、お磯を放逐さる事と
何れ、何れお貴嬢が奥探のお居るお花の
て、まどいといけな此お小さいのを其探お

心さ針で刺さる思ひ、
あ如所しと見捨て行かれやう、
居られぬ体・鳴呼如所せう
然し泣くも居られぬ場合故
年任馴れと人の乳を見返り
と歸て寤る牛の内のお子
茫然と稚見の心とハ如様で
ひまん？ 出てゆく人ハ見返り
人の後を追って出てゆく人ハ見返り
可慕可愛
切つて、十
と注伏しましと、
鳴呼其時の乳母
見送る
一草でしと。

扱乳母が出て往つ後々お花が稚見と酷く当
ること愈甚しく、果ハ僅の過失の爲めお花、
此様いけ酒垂々々と子ハ中々叩いさ位で
ハ性根が付かない、市膳でも喫させじ置い
とと氣かつくぞう？ と哀や年々お花
見を一間の中へ閉込めて、一日お窮命させし事
も指ましと。斯る時ハお花の者ハ互に援け
合ひましと。お花が閉込められ居る時ハ弟
か食物を常々運び、弟が押込められて居る時
ハお花が食物を持て往てやりましと。お花

窓の外から種々子懸めてやるのが常でして。
斯いふ事が済むか父が父の色の濁れて
居る故に少しも其の氣が着ません、よし氣が
着ても其を悪い事と思ひますんでして。
やう姉弟二人の今此様な苦しみで遇ふは付、
實の母様と乳母とが慕わしく、
てハ、母様の如くなまそつとらうり？
此世を悲しんで、男禁
制の尼寺へ身をお隠しとの事ハ、祖母様のお家

小お居での中ハ如何がなしてお目子懸れる事
も拍らうか、其様な所へお這入で人じり
お目子か、れる事お出来まい、と小さき袖
を濡しました。
恰度其頃、事の潔の家、の門前小高井雲谷とい
ふ一人の西洋画家が住んで居ました。此人と
近頃何れか、
で、
朝から晩まで家子閉籠って居ると何と何と歎書て

居まらん。さう次と習わし朝か不意お居なく
かりて睡方な帰てくる事もあるが、又
ハ翌日帰つてくる事もある。何れか
へ往て何をしと来るの状も知らず居まらん、
唯雑の目も遠入りのハ装束も振も管をん、
年中醫達も居る事、其が誰の目も
も分るのでん。然し斯醫達も居るも
係もそれ、容貌も如何にも柔細で人易みも氣
高い所もありまらん。
ある朝の事と一際が前に遊んで居る時

画家の高井ハ門前お立て愛らしい潔の姿を眺
めて居るが、やがて声をかけて、
潔さん画をあげるからお出なさい。
と叫びまらん。で潔ハ其後へ附て門内へ
這入り、庭の靴脱の上へ立て待て居るが、
見るともやしと室内を見らると、繪具などを取
散して有て、墨ハ一面のシミだらけ、壁の下
のハ書かけの画が澤山立懸て有て、室の紙脈の
体で凡。潔ハ是等のこのを見廻して、壁を懸て居る一
を上の向へけました、而して壁を懸て居る一

ワの大きな額、
の、白毛を着た天使が翼を廣げて天に向て飛
ぶ所を畫いと額、其を見ても大層驚きまし
其も其驚でん、此天使の容貌が潔の母を生寫
でしとから。

や、母様ど！
と叫んで上へ飛上りづか
しけと其()を見詰りて居ましと。而して
かくの下の往て

母様の通りど、私母様かと思つと。翼が生

て居るから違を。画家の笑ひを合

みながと聴かめて。居るのど？

だつて此人が私、私の母様も似て居ましから、だ

か、私使が？ 似て居ないでハない歎貴

君の母様かハ。

否、今の母様でハ、私の真成の母様
小。真成の母様の通りでんよ、唯是で翼が生

てなれば宜い。 祢へ叔父さん、
何故此人ハ
其ハ羽生て居るのぞせう祢へ？
其ハ人間ではない天使だから、 天

の使だから。
天の使？ 何で祢、 天のお使ををる
人なのぞれ祢、 天のお使ををるハ羽生か
くつてハ出来ないから、 其で羽生て居るの

でん祢
あ、 まあ左様調々様とどのぞ。
さう、 此人の天人と。 私の母様と此天

人お似て居るのでんぞ、 大変およく似て居る
のでんぞ。

言ッて悲しさうな息をしまし。 画家は是ま
でジツト稚児の息を見て居るが、 此小至て其

傍へをり寄り、
でハ貴君又ハ変成の母様がお存のでん祢、
お、 其ハ今如何なさいましこの。

今ハ尼寺へお遠入りでん。 母様と大變は好
人でしとよ、 大變は可愛ケツて下さいますし
とよ。 母様さへ居れば宜いのでんけれども。

言て情状を聞きし、俯仰も、小さな胸を歎息して情
状と云へ、俯仰を聞きし、胸を歎息して情
動しと云ふと見え、
画家の深く感

てハ貴君ハ定めし母様小遇ひとかりし事
と問ハ、潔ハ頭と云ふ天と仰で
遇ひ度ひと云、遇ひ度くつて遇ひ度くつて
仕方がないのぞい。私母様の事を考へると
悲しく云ふのでい。

言つてと云ふ涙ぐみましと。画家ハ悪い事を聴
と云、後悔の念で、やさしくも潔の頭を撫て、

あ、悪事を聴て悲しませた社へ、勘忍して
おくれ、可哀相、此様少さくて、さあさ、
此画をおげりから機嫌直して外へ遊びお
出。そのお朋友の事がして居まは。
やさしく云へ、バ、潔ハ嬉しさをみ貫つと画を眺
めて、

有難う。でハまゝ来まはよ、私母様も似と
彼人を見たいのぞい、私
言ひつ、急ぎ思ひ出さし、私
あ、お父さん、あの社へ、私の姉様も社へ

借度彼額の母様を見たいとさうりつへ、
今お連れして見せてやうて下さいな、
叔父さん所頼ひでんかよ。
と固く約束して出てゆきまゝ。
帰る刻限を見計らうて、
細と語り、誘つて画家の家へ同伴て来まし
と。母様お遇ふ様々気がたると言つて歎きま
し。此日から潔ハ画家と強んど朋友おなつ
て毎日の様お遊びおやき、
而して姉の

の母様お對して恩愛の情を語つて居まし。
然し画像の花の唇を空しく歸て居て潔やとい
ふ唯一言のやさしいお聲おびえません、
潔愈心を苦しめまし、
ひ申しまゝ、
て断然お月子機およくと決心して、
足お母お思ふ一心、ある朝の事と、
をさして出かけまし。

六回
潔の家から尼寺までハ道程凡そ一里餘も有ま

凡ハ朝霜を吹て寒中口強く有りまし。然し潔ハ一向管をんぞん。と、母ハ遇ひ度といふ心ハ彼の歩みと軽くし。まじ。潔ハ一里の道を行ハ何時間か。る程、まじ自分の足ハ何里程位歩ける歟其等。の事考へません。唯無糸若菜の家を出て無糸若菜の寄居のてん。然る道の半ハ里とほど歩かぬ足ハそろく疲帯れ。て来まし。而して大井ヶ原といふ大きな原へか、ツツと時よハ、
 進まればせん
 下
 進み

とう一足ハ足ハ前へハ進みません。心ハ矢猛ニ早ても足ハ霜の上へ氷り着てけぬのかと思ふ程で。で仕方なし草の上へ尻餅を搦て先づ足を揉んで休んで居まし。恰も宜權十といふ村の車夫が空を絞って通りかき、潔が力無き、う小草の上へ腰を搦て悲しさを寫し居るのを見て、
 やれ雪野の古坊探、如何もされと一人て此様所へ打坐てござりて？ ああ？ 一人て村まで行くと、其犬愛ど。まど一里程もあ

人べい、右前様お歩けるか祿？ あふ？
瘡帯とと？ 左様ごんべい、それおい祿、
無益ごあ、行かれ祿へど、私棄けてッてや
んべい、乗ッせい車へ。
窮乏地獄で佛とハ比事、潔ハ喜んで其車へ乗
り瞬く間ニ池田村へ着まッ、而して尼寺と
マサシキ寺ありて、門内へ這入て住まッ。
潔ハ云道か、果母を請もろと思ひ其方子伺て
ゆきわけけが、此時ふと横平の方か、小見の
遊んで居る声がすえまッ。で小見ながら考

一ま、玄関見
いと不可か、何処か往て若遇をせてくれな
よ、ソレ所て遇てやう、と斯考へまッ、
而して小見の指んで居る所を通り抜けて裏庭
の方へ進んで行きたまッ、
ハあるが一面の孟宗藪で、
目の内垣が結ひ廻して、庭の向ふハ菴室で、
生々廣々と、庭の向ふハ青苔の
如く標比処が半敷と見え、
立てられてあります。
潔ハ四ツ目垣子身を持

よいと 疲勞を我慢して立て居ました。而
其か 大變な事なりました。
り 死なうしと。
再び障子がさう

今度ニセハ！
潔ハ目と丸くしました。
然し今度も又其人で
ハ指りませんでしよ。五計の尼法師の鼠木
緞の衣服の上へ法師袴を穿たのが、本
を午の捧げて様を廻って何れか去って仕舞ひ
ました。會ぬの向達も潔ハ悲しき母の
然し又潜然と泣出しました。然し母の
然し母の

一念ハ又雅児の勇氣を惹起し、彼ハ辛坊強
くも又母の現れぬのを待たせました。今
ハ長く待つ及びません。正面の障子
がさうりと飛いて静に木を出て、其人ハ正
悪ハ母様！
母様！
と叫びました。然し母親ハ此處に我子が来
居るうとハ夢の思ひ家々め事なれ、其故
内ハ何れを歎かして、是程待てお仕舞ひ
潔ハ背を向けて、縁側を廻りてお仕舞ひ

てし。 潔ハ暫くハ茫然として居る。 又さめ
さめと泣き出しました。

あ、従て仕舞つて、 不可せん！
宜うう？ 許さないのかやあ、 彼様何しよ

んどのみ？ 餘りごやあ！

言つて大愛おしくして居るが、 若し何と顔を奉て見
人の足音がするえま。 然も今どの程の方と眺め
ると矢張母様でん、 眺め出て来ましと、
眺め出て来ましと、 母様！ 母様！

精一杯の声で叫びました。 母様！
我子の声、 驚いて此方を後に見るが、
子の姿を見ても否や、

あ、潔や！
いふより早く縁側を駆け下り、
足で垣の下へ走り寄り、
心かりと潔の顔を抱つて、
居ては、 潔も嬉しさを感づき、
わくわくおぼけて泣いて居ました。
泣いて居ました。 抱き取り、
又して母の手に抱か

き締めて

是、潔や、お前まあ善来ておくれで有つ

祿へ、如何しと来は

これと事さへ、一、一人で有るまい祿へ

涙ながすと、向ひかけまし、潔も又涙ながすと、

母様！一人で来との、私母様も遇ひなく

ッて遇ひなくッて仕方がないから、今朝一

人で無茶苦茶に来との、其から祿者とか

と余中で休んで居ると、權十か事を亭へ前

を通つとの、而して私を棄せて来てくれと

の。私大妻も此処で待てまよよ、先き呼

んどの聞えなかつたかい、え、母様！

と頭をかき上げてさうも驚しさうも聞ひかけまし

と。母ハ片手で涙を拭ひ、

あ、左様であつたか、甚君しておくれ、お

前が此処へ来て居やうとハ気が附なかつた

から祿へ。よく来ておくれで有るとか家へ

ハ其でハ黙て来とのぶらう祿へ？

あ、家へハ黙ッて、又夫のへ、学校へ？

姉さんハ如何しと、又夫のへ、学校へ？

あ、姉さんハ学校。
左様か。

言ッて抱へて居る年をゆるめて
お、僅見すい中子

大層大きくなッて、

とさの嬉しさをいぼちや
又歎息して其頭の毛の

ふんふんとしてを撫でやりながら、
乳母も出されたといふが、其後ハ姉様もか
前ハ難儀をおしごうう祈へ？

あ、醜い目子遇ひまれば、だりや嫁さん

母様ニ始終母様の事計思ッて居るの。

母様ニ法師ニやうなの？
尼法師ニやうな事止

めて下さいよ、私母様が尼法師ニやうなの

ハ厭だとの、私大きくなるとえたい人ニや

ッて母様ニ孝行しまれかたよう、よろ尼法

師ニやうの癒めとお祖母様の家へ帰ッて下

さいよう、よろ母様！

愛しい声で祈ぶる様子に説かれ、母ハ玉
の緒のゆるぐ計わり、思ひ返して借度女

心弱くては、
門前の花巻老翁の頼み

て、然るべき車を一輛備ひ、
其子牧子と乗せ

其れ
て送り届させました。見送り見送る母子の情

はくどくしいかと思ひ、
潔の配が大変で、父、陰謀を主であつて

が、朝から潔の氣が見えぬので、
潔の氣を見えぬので、潔の氣を見えぬので、

ぬと召使を叱り付け、
人を八方に散らして、

之際中、潔の氣を平氣で帰って来ました。
と潔の氣を見るより、母、ハハととて、怒りも

し、
而して何処に居ると責問ひました。

と、
如何に責められたか、

と、
怒り、

と、
怒り、

と、
怒り、

と、
怒り、

と、
怒り、

と、
怒り、

と、
怒り、

此様 雅見の 行の 大 人 弱 奈 中 其 進
酷い 目 子 遇 ふ かも 知 れ ぬ 彼 様 奴 苦 め られ
る の も 残 念 ぞ と 小 見 つか 意 地 を 出 し 進
んで 行 き ま す 朝 休 ん 大 井 の 原 へ 来
る 時 分 小 金 吹 香 と 朝 休 ん 大 井 の 原 へ 来
て 暑 凡 小 敷 雪 大 波 の 岩 を 吐 け ぬ 難 儀 と 肌
如 く 東 西 混 れ 日 月 也 け ぬ 難 儀 と 肌
り ま す 寒 風 凍 へ 了 魚 と 切 り 肌 を
此 様 雅 見 の 行 の 大 人 弱 奈 中 其 進
此 様 雅 見 の 行 の 大 人 弱 奈 中 其 進

小 晝 頃 催 し 居 雪 天 繋 が 家 を 出 て ま ぐ
僅 ニ 三 丁 へ 来 しか 思 不 煩 ち ち り け っ と
降 ツ て 来 しか 忽 ち 大 降 止 せ っ て 来 て 凡 々 へ
強 く 暑 れ 出 しま っ っ っ 潔 也 驚 っ て 引 返 さ っ っ っ
躑 躑 し て 見 せ 若 今 引 返 っ っ っ 此 上 如 所 標

て 一 所 子 尼 子 ぢ ぢ ぢ 其 方 が 餘 程 宜 々
と 淡 し い 心 子 何 の 訳 も なく 決 心 して 番 の 女
中 の 隣 間 を 伺 ひ 我 家 を 覗 び 出 して 其 日 の
三 時 頃 再 び 池 田 村 と 出 城 せ し 然 る

身馴れと可慕やつかしい人の声か
 遠く、遙々の遠くで叫んで居るの
 小潔ハ
 昔子返り、不思議さうみ下を見れば、
 金殿玉楼も天使も消へ
 母の影さうさう、身ハ百姓小屋の火燵の傍
 小抱かれ介抱を交て居ました。

(完)

正氣子返つてから潔ハ大層母のお諭を受て、
 再び我家へ歸り来ハえ、い人おなツととい
 事々々々

